

書評：印紅標著『失蹤者の足跡—文化大革命期間的青年思潮』

土屋 昌明

はじめに

本書は、文化大革命時期における青年運動を社会史・思想史的に分析した画期的な研究である。本文は中国語で 550 頁余、入手困難な多くの資料を引用し、内外の参考文献を中に示しており、資料面でも充実している¹。

文化大革命（以下、文革）がいつから始まったとすべきかには諸説あるが、紅衛兵による青年運動が文革を代表する大衆運動であったことに異議をはさむ人はいない。彼らの多くは当時 10 代後半であった。1966 年 8 月、彼らが天安門広場に登場したときには、「毛沢東主席」を「衛」り、毛主席の唱える文革の目標を徹底的にやり遂げることを決意していたのである。そして 10 年たって彼らが 20 代から 30 代になった 1976 年には、文革を支持する毛沢東夫人の江青およびいわゆる「四人組」に反対する運動が天安門広場でおこった。この事件に参加した人々と、紅衛兵運動に参加した人々は、べつの人々ではない。そして 81 年 6 月に文革は中国共産党の正式見解として完全否定された。人々は経済活動へと徐々に進んだが、その後、1989 年 6 月 4 日の天安門事件が発生した。この運動は学生だけでなく、社会の各層の人々が参加した。そのとき、紅衛兵だった人々は 30 代から 40 代になっていて、そうした社会の各層で活躍していたのである。90 年代から現在まで、中国は経済発展の道をひたすら歩み続けてきた。その中国社会の各層で活躍している人々の多くが紅衛兵世代である。

このような中国現代史の深層を理解するためには、紅衛兵たちの経験と思想を理解することが絶対に必要である。しかし、80 年代後半に入ってから文革について反省したり回顧したりすることは好ましくないものとされ、中国政府は文革についての言論を厳しく制限する政策をとるようになって、現在に至っている。その結果、現在でも文革の話題は一種のタブーであり、その経験は後世に引き継がれない傾向が強い。少なからぬ文革経験者が歴史の埋没と忘却に反対しているが、現在の状況に抗うのは容易ではない。

こうした状況のなかで、文革に関する議論はおもにその評価や是非の問題、無数に起こった事件の真相の探求、そうした事件の背後の政治的な動力の問題などが多い。しかし、紅衛兵と

¹ 著者の印紅標氏は 1951 年北京生まれ、現在、北京大学国際関係学院。2008 年 12 月に本学社会科学研究所定例研究会で講演し、その講演にもとづく論文「中国における文革研究と文革の記憶」が『専修大学社会科学研究所月報』(No.559、2010 年 1 月)に鈴木健郎氏訳で発表されている。なお、この学院は専修大学の国際交流提携校で、評者は学生の中国語短期研修のうちに親しく教示を受けたことがある。

いわれる人々の経験や思想の問題に立ち入るような研究の方向は、これまで多くはなかった。本書が持っている、従来の文革研究書と異なる特徴は、まずこの点にある。つまり、文革時期の政治動向がどのように推移したのか、その背後の政治闘争はどうだったのか、といった従来からの問題をふまえつつ、紅衛兵の経験と思想を分析し、彼ら青年たちの内部にどのような思想の違いと特徴があったのか、その社会的な背景はなにか、66年から76年の期間に彼らの思想はどのように変化し、76年の「四人組」打倒へ至ったのか、といった問題を扱っているのである。彼らの経験と思想は文革期間やその収束後数年の間に弾圧・抹殺された場合もあり、また政府による文革の完全否定によって、問われる必要のないものとされ続けてきた。それを追求する本書が、その書名を「失蹤者の足跡」とする所以はここにある。

本書の概要

本書は政府公式見解にそって文革を66年から76年とし、これを66年から68年、68年から76年の二期にわけて論じる。前期は文革の主たる時期であり、また紅衛兵運動の時期である。この時期は壁新聞・新聞・集会などの「大民主」方式により、基本的に中共中央に許される範囲で言論を発表していた。68年秋以降は、大衆のこうした「大民主」方式による言論発表は、中央の思想統制の下に抑圧された。しかし、少なからぬ人々が新たな思想的挑戦をしていた。本書はこれらの動向をそれぞれに追跡する。

文革は中共の党内闘争によって起こったが、文革期間中にはその闘争がイデオロギー論争としておこなわれた。つまり、大衆に対してイデオロギー統制することにより、大衆からの支持を得るといふかたちをとった。それは大衆の利益にも関わるので、大衆は政治理論上の問題に対して関心を持たざるを得なかった。また、格差や差別といった社会問題が政治的な混乱に伴って顕在化し、政治問題に関心を持たざるを得なかった人々を刺激した。このような状況が、この時期の思想史的な環境となっている。

上述したような紅衛兵世代は、1940年代から50年代に出生し、新中国の教育だけを受けており、とくに57年の「反右派」運動以後の政治教育を受け、毛沢東思想の影響が強い。文革開始時期に彼らは大学生か高校生であり、大学生は「老五届」、高校生は「老三届」といわれる。

「老五届」は大学卒業後、農場や鉦工業に参加させられて再教育をうけ、それから基幹的な専門業あるいは一般的な職場に配置された。「老三届」は高校卒業後に農村や辺境の生産建設兵団あるいは農場に居住させられ、大部分はいわゆる「上山下郷」（下放）の知識青年となり、一部は都市労働者あるいは兵隊になった。1971年におこった林彪のクーデター未遂・墜死事件のあと、こうした下放青年たちは徐々に選別されて鉦工業にまわったり都市に戻ったりしたが、多

くの者は文革収束後にやっと都市に戻ることができた。彼らの中から、政治社会問題に対して冷静かつ深い思考をする者が出た。それは、技術教育を受ける機会を喪失させられたという疎外感と、政治闘争、そして下放先での厳しい現実といった状況のしからしむるものであった。

彼らの思想が問題とした対象としては、文革運動そのもの、中共の党内闘争、共産主義インターナショナリズム、社会主義国家制度、社会関係や社会矛盾、農村や教育における不均等な体制や制度などなど、非常に広い範囲の問題について思想的な探索をした。そして、文革に熱狂的に参与して、プロレタリア階級独裁下の継続革命理論を学習しようとする当初の思潮から、こうした理論を指導するイデオロギーへの疑問と批判へと変遷を遂げた。本書は、このような変遷の過程とその原因について検討している。それゆえ、社会的な影響を備えた思潮はもちろん検討の対象となるが、それだけでなく、当時の社会ではほとんど表に現れなかった思潮も、検討の対象としている。前者は、66年から68年の紅衛兵運動の期間に渦巻いたものであり、後者は68年秋以降に農村や辺境ではそぼそと営まれた、当時にあつて秘密あるいは非公開のものである²。このような思想的な営みが、76年の天安門事件をはぐくみ、また70年代末の思想的な解放を準備した、と本書は考えている。

各章の梗概

上編は、66年から68年の紅衛兵運動時期を扱う。第1章では、「老紅衛兵」と「保守派」について述べている。

「老紅衛兵」とは、66年5月29日に成立した清華大学附属中学³の紅衛兵と6月2日成立の北京大学附属中学の「紅旗戦闘小組」が代表的な組織であり、66年8月18日の毛沢東による第1回紅衛兵接見ではじめて表舞台に登場し、世界を驚かせた。彼らは基本的に北京市の中学の学生だが、毛沢東の支持を得て、紅衛兵運動のモデルとなり、その行動モデルが全国に波及し、次々と模倣組織が発生した。模倣の次には分裂がおり、模倣・分裂した組織とオリジナルの紅衛兵とを区別する気持ちから、「老紅衛兵」といわれる。これら模倣組織を含めて、彼らの基本思潮は保守派に属する。

彼らの特徴は、①学校における造反を率先しておこなって「教育革命」を進める、②学校の役職者や教師を修正主義路線として批判する、③運動において文革工作組の束縛を受けようとしない、④出身家庭による階級路線「血統論」を宣揚し、労働者・貧下中農・革命幹部・革命

² いわゆる「思想村落」（思想村）のこと。朱学勤「思想史的失蹤者」（三聯出版『讀書』1995年第10期）。本書の題名は朱学勤のこの論文を承けたものである。

³ 当時の「中学」はいまの日本の「高校」にあたるが、固有名詞との関連から、以下、中国語の「中学」をそのまま文中に使うこととする。

軍人といった家庭の子弟である自分たちは優遇されるべきであり、それ以外の青年に対しては蔑視と迫害をする、⑤旧文化およびそれを信奉する人々を打倒する、⑥運動の矛先を中共幹部および文教分野以外の「党内実権派」に向けることには反対する、という点である。なかでも⑤のいわゆる「四旧打破」運動は苛烈を極めた。中華の伝統文化・西洋文化・ソ連文化はすべて封建主義・帝国主義・修正主義として批判され、破壊された。これは、階級闘争を綱領として62年以来おこなわれた政治教育の暴発的な結果である。しかも残酷な暴力をとまなう赤色テロであった。彼らには革命の暴力に対する盲目的な崇拜があり、映画や小説や回想録に描かれた革命時期の農民運動などにおける暴力を模倣したのであった⁴。しかし、66年10月に毛沢東が「批判資産階級反動路線」運動を発動し、大衆運動の矛先を党内実権派に向けさせ、「老紅衛兵」の血統論を批判するにおよんで、困惑するに至った。つまり、毛沢東の指し示す方向に進めば、みずからの父母にあたる人々を批判せねばならず、方向を違えれば、毛沢東に反対しなければならなくなる。彼らには行く手を塞がれて瓦解するに至った。

「保守派」は、「老紅衛兵」が出現した前後に、中共党委員会や工作組の指導を忠実に守った学生である。彼らは学生の多数派であるが、「左派」「革命派」と自称し、工作組を批判する少数派の学生（大学幹部を批判し、その後、大学に進駐した工作組からきびしく抑圧された）と対立した。66年10月に毛沢東「批判資産階級反動路線」運動の発動後、工作組を批判してきた少数派は中央の支持を受けて「造反派」を自称するようになり、工作組から信頼されていた多数派の学生は次第に少数になり、「保守派」と称されるようになる。

彼らの特徴は、①中共党委員会あるいは工作組に依拠して文革をすすめる、②出身家庭による「階級路線」に賛成する、③66年10月に毛沢東「批判資産階級反動路線」運動の発動後には中央文革小組打倒にまわる、という点である。彼らは工作組が指導する期間に党の組織にしたがって運動を進めるように思考した点で、社会秩序および日常生活の破壊を緩和させることとなったが、それは相対的な作用であり、「老紅衛兵」の四旧打破や血統論を支持した側面も見逃せない。

第2章は、「造反派」紅衛兵と極左「新思潮」についてである。造反派は、「老紅衛兵」および保守派と対立する派閥である。66年6～7月、学内における工作組のやり方に反対する学生が現れ、工作組によって批判されたりむごい仕打ちをうけたりした。その前後から「老紅衛兵」が表に現れて活躍し、工作組に反対した学生は少数派として抑圧されていた。10月に毛沢東が「批判資産階級反動路線」運動を発動すると、「少数派」は工作組を批判していたために中央の

⁴ Carma Hinton, Geremie R. Barmé, Richard Gordon らによるドキュメンタリー映画『Morning Sun (八九点鐘的太陽)』（香港中文大学出版社・中国研究服務中心、2005年、Long Bow Group）がこの点を具体的に例示している。

支持を得て発展し、各地に拡大して「造反派」を称するようになった。そこには、「血統論」（家庭の階級により本人の階級がきまるとする）に反対する学生や「血統論」によって抑圧された者が参加した。66年末には「老紅衛兵」や保守派にとってかわって、多くの学校で優勢を占めた。

彼らは家庭の出身を強調せず、出身の悪い学生（家庭がもともと資本家だったなど）もいた。彼らの出現にいたって、毛沢東はとうとうみずからにしたがって党内走資派を打倒する大衆を獲得したのである。彼らの特徴は、①党内の資本主義路線、「資産階級司令部」を打倒する、つまり文革初期の工作組を指導していた劉少奇・鄧小平を打倒し、みずからが文革初期の工作組にきせられた汚名をそそぐ、②「血統論」を批判する、③毛沢東の継続革命、「大批判」「すべてを疑え」を信奉する、という点である。

造反派は67年春ころから内部のセクト対立が生じた。一般的に見て、それは「温和派」（右翼）と「激進派」（左翼）にわけられるが、思想的な分岐は基本的に中共中央から許される範囲内で展開された。この両セクト以外に、「首都五一六紅衛兵団」「湖南省無産階級革命派大聯合委員会（省無聯）」など、少数の極端な激進派があり、彼らの思想はあきらかに中共中央から逸脱していた。これが本書でいう「極左派」である。温和派と激進派の論争点は、毛沢東の永続革命論の枠組みにおいて、温和派はプロレタリアート専制を強調し、激進派は永続革命を強調する、という思想的な相違があった。

「極左派」の「新思潮」にはいくつかの種類があり、「極左派」として統一していたわけではない。ただし、それぞれに共通する特徴は、①官僚の特権を批判する、②時の政治経済の制度的な来源を検討する、③パリ・コミューン式の原則によって社会制度変革をおこなう、④官僚主義のない社会を建設しようとする、などの点である。これは、造反派が中共中央の党内闘争に影響されていたのとは一線を画しており、毛沢東晩年の思想を承けたものである。彼らは49年以来の中国の基本制度の正当性に挑戦し、文革の直接的な目標から逸脱していたために、文革期間中すでに「極左思潮」として弾圧を受けた。したがって、実質的な運動は地方的な微弱な激進派と結びつくにとどまるか、あるいは少数者の言論として現れるだけであるが、本書では思想的に重要な個別の例について、相当の紙幅をさいて述べている。

新思潮の第一波としては、66年8月30日に北京大学学生の喬番武と杜文革が張り出した壁新聞、10月17日に北京師範大学学生の李文博が張り出した壁新聞、11月15日に北京農業大学附属中学の劉握中と張立才が清華大学に張り出した壁新聞などで、基本的にプロレタリアート専制の改善と社会主義制度の革新を訴えたものである。彼らは中共中央の弾圧を受けて逮捕投獄された。

67年6月11日に北京中学の雑誌『四三戦報』に発表された「論新思潮—四三派宣言」では、

財産と権力の再分配が主張された。この主張によれば、社会矛盾の根源は現行制度内にある。つまり、人民は実権派による財産と権力の再分配を監督する立場にあり、したがって社会主義下における革命の本質は、再分配の要求を不断に出し続ける人民と、既得権益を守ろうとする実権派特権階級との闘争となる。文革の目標はこの両者の矛盾を解決させることであるとする。これによれば「老紅衛兵」はまさしく反動勢力ということになる。

67年6月14日には北京の学生が「首都五・一六紅衛兵団」を結成し、周恩来と国务院に反対した。彼らの関心は制度変革ではなく党内闘争にあり、それゆえ社会政治の分析や理論面では独自な見解を出せたわけではない。しかし、文革中ずっと中央で指導的立場にあった周恩来を批判したことは、その後の極左思潮の周恩来批判の端緒を開いたものである。直後、江青らは周恩来批判を毛沢東司令部に対する批判とみなし、非常に危険視した。それゆえ、「首都五・一六紅衛兵団」は結成後数ヶ月たたずして反革命組織と認定され、関係者は逮捕・審査された。この紅衛兵団が問題となるのは思想上ではなく、政治闘争上である。彼らが弾圧された後、この兵団は実質的には瓦解していたにもかかわらず、地下組織として存在しつづけているとみなされ、およそ革命委員会や解放軍に意見を持つ者を逮捕・審査するときの口実に利用されたのである。つまり、少しでも問題となる人物を「五・一六」の関係者として逮捕し、残酷な拷問などによって「五・一六」との関係を自白させる、ということがおこなわれた⁵。

67年10月から翌年1月にかけて、湖南「省無聯」の楊曦光が新思潮の諸論文を書いた。彼によれば、中国の現政権はマルクスが考えたパリ・コミューンとは何ら共通せず、すでに人民を搾取圧迫する新たな特権階級が出現している。したがって、中国には新たな暴力革命による特権階級の転覆が必要である。そうしなければ、パリ・コミューン式の民選を基礎とする政権は打ち立てられない。彼はこの考えを68年1月に「中国はどこへ行くのか？」と題して詳細に論じ、ガリ版刷りで80部作成し、うち20部ほどが出回った。ところが、多くの大衆組織によって再印刷され、全国に影響が及ぶこととなった。中共中央は68年1月はやくもこれを批判し、「省無聯」は取り締まりを受けて、楊曦光をふくむメンバーは逮捕投獄された。しかしその後もこの論文は影響を与え続け、香港経由で国外に流れてアメリカの新左翼に影響を与えた。

ほかにも武漢「北結揚」、山東「渤海戦団」、ハルビン工業大学「衛無」、上海「中串会」などの状況と特徴が本章では述べられている。

第3章「非主流思潮と紅衛兵思潮の比較」では、紅衛兵の各流派に属さずに独自に思想的な営みをした非主流派をとりあげている。彼らは文革の意図に背馳していたために、批判や監禁、さらには殺害されるに至った。しかし、68年以降の青年たちの思考に継承された。

⁵ 巖家其らの『文化大革命十年史』（辻康吾監訳、岩波書店、1996年）によれば、この冤罪の被害者は全国で数十万人にのぼるといふ。

66年9月24日、北京外国語学院の学生・王容芬は、毛沢東が大衆を動員して行く先のわからない文革を進めているのに対する疑問を綴り、中共中央・毛沢東本人・共産党青年団中央など数カ所宛に郵送した。それからその手紙のドイツ語訳を携帯しつつ、ソ連大使館の前で殺虫剤を飲んで自殺をはかり、そのまま大使館へと駆け込んだ。自殺することにより、文革に対するみずからの反対意見を世界に知らせようとしたのである。しかし彼女は死にきれず、反革命罪で逮捕投獄され、79年3月まで拘禁されたのであった。

66年9月28日、上海の労働者であった劉文輝は、毛沢東の階級闘争論に反対し、文革を批判する文章を書いて全国十四カ所の大学に発送した。11月26日に彼は逮捕され、67年3月に死刑執行された。

ここで、彼らの問題は、単に思想の問題としてのみ考えるわけにはいかないことがわかる。すなわち、彼らのみずからの思想に殉じた点にも、当該時期の思想と行動の特徴があるといえるのである。その例として、遇羅克が文革初期の「血統論」に反対して書いた「出身論」、文革を民族文明の破壊として反対した王申酉、文革中の党内闘争に反対、劉少奇を擁護して林彪らを批判した王正志、文革を全面的に否定した呉曉飛などについて、その思想と行動を本章では述べている。

前編の最後に、以上の紅衛兵流派について、その文革観（文革は文化革命か、政治革命か、社会革命か）、社会主義社会の階級・階級闘争とはなにか、資本主義の復活とはなにか、文革の進め方はいかにあるべきか、毛沢東の晩年思想との関係、紅衛兵の思想に窺えるポピュリズムの傾向、紅衛兵思潮の社会政治的な根源などの問題を相互に比較しつつ検討を加えている。

後編は、68年から76年の「上山下郷」運動および「四五運動」（天安門事件）についてである。

第4章では、上山下郷運動で農村や辺境へ赴いた青年たちが、どのような政治・社会的な環境にあったか、そのなかで彼らはどのようにして読書し思想活動を実践したのかを明らかにしている。68年に大衆運動が終わりを迎え、そのあと70年まで、中共中央は秩序の回復と新体制の確立のために政治的な緊張を強化し、種々の抑圧をおこなった。その過程で、打倒されたいわゆる走資派に加えて、そのような走資派を打倒してきた造反派も抑圧され、農村や辺境に送られた。彼らは、農村や辺境の厳しい現実、経済の悪化、生産管理の混乱、貧困、基層幹部と大衆の緊張関係、政策の失敗などを目の当たりにし、都市におけるみずからの境遇との落差、紅衛兵運動で抱いていた理想との落差に愕然として、その厳しい現実をどのように解釈するかがあくことになった。その後、71年9月に林彪のクーデター未遂と墜死により、それまで毛沢東を信じていた人々は深い疑念にとらわれ、文革が作ってきたイデオロギーの堤防に大きな穴があくこととなった。こうした環境にあつて、彼らの思想の特徴は次のようである。①文革の紅衛兵運動における理想主義とその挫折がトラウマとなった、②社会の底辺において思考する

ことで、独自の思想的探索をした、③党の指導や知識人の教導から離れた、独自の自由な思考が可能だった、④名誉や社会的地位などの打算的な動機ではなく、純粋に理想主義的な知的追求をした、などという点である。本章では、こうした思考の実践がどのようにおこなわれたのかを、読書活動、図書の内容、読書の内容、知的な討論のための研究会などについて、社会史的な検討を進めている。とくに、いわゆる「思想村」については、山西省太谷県の「戦友」、北京や上海の「沙龍（サロン）」、河南省駐馬店の農村調査、貴州省安順市の「思想村」、寧夏回族自治区の「共産主義自修大学」などについて詳細に述べている。

第5章は「上山下郷時期の青年の思想探索」として、68年から73年にかけて、文革の政治運動、党内闘争の是非、個人崇拜、林彪事件、文革以前と以後の政策の比較、経済体制、社会制度、民主主義、言論の自由などの問題について、青年たちの中で議論されたことを明らかにしている。その例として、林彪・江青を批判した姜明亮、個人崇拜に対する反感と林彪に対する疑念を表明した李九蓮、個人崇拜を批判した丁祖暁、林彪を批判した石仁祥や胡全林、劉少奇打倒を疑問視した張坤豪など、多くの青年たちが悲劇的な最期を遂げた事例を詳述している。また、経済政策に対する批判としては、農村の土地制度や階級闘争・個人崇拜などの弊害を建議した蕭瑞怡、農村における生産請負制の合理性を議論した張木生、社会制度に対する批判としては、社会主義社会での新階級の発生に関する理論的問題を探索した許成鋼、内蒙古・陝西・北京の青年たちが文通によって「幹部は一つの階級」という観点を思考したことが発覚して批判を受けた「理論通迅事件」、社会主義下の階級闘争は官僚と大衆の間の闘争であって官僚は社会主義下の新階級だと述べた楊瑞、民主と自由に関する思考としては、階級闘争ではなく生産関係の変革によって社会を進歩させることを提案した権佳果、林彪の政治的野心に疑義を唱えて民主と啓蒙を期待した盧叔寧、言論と出版の自由については、真理には階級性は存在しないと壁新聞に書いた不平（ペンネーム）、などの事情が縷々述べられる。

以上は、それぞれの思想を表明した個別の人々の事情を明らかにする点に重点があるが、この章の最後では、林彪らが毛沢東の暗殺計画を記した「571工程」に対する青年たちの反応を横断的に検討している。この「571工程」は、林彪の死後に、林彪を批判する目的から公開され、大きな社会的反響を呼んだ。これに対する青年たちの反応を分析することによって、この事件をきっかけに文革を反省する方向に青年たちの思考が転回したプロセスを描き出している。

第6章では「批林批孔」前後の青年思潮が論じられる。この期間、つまり73年から75年の間は、毛沢東のコントロールの下、文革推進派と指導的な幹部とが新たな党内闘争を繰り広げていた。74年に始まった批林批孔運動は、表面的には孔子批判を展開したが、じつは周恩来らの指導的な幹部と林彪とを結びつけて批判することに狙いがあった。75年1月に周恩来は64年に提起した4つの現代化政策を復活させ、それとともに鄧小平による政治経済のたてなおし

がおこなわれた。しかし文革を推進するグループはその年末までに巻き返しを果たし、鄧小平批判をおこなった。こうした政治状況下で、中共中央は上山下郷した青年たちを徐々に地方都市や大学に戻す政策に転換した。それゆえ、上述のような農村や辺境における独自の思想を形成した青年たちは、都市に戻ると同時に党内闘争への思想的な探索を始め、それはすぐに広い大衆的な思潮へと成長した。また社会制度に関する思想を抱いていた者たちも、引き続き特権階級に対して思索し、党内闘争によるイデオロギー操作から独自に、制度の変革を思案していた。こうした青年思潮の代表は、74年11月に「社会主義の民主と法制について」を壁新聞に発表した李一哲である⁶。

李一哲は林彪を左傾主義として批判し、それによって党内闘争における文革推進グループ(いわゆる四人組)に反対した。李一哲のいう「民主」とは、①国家と社会に対して人民が管理する権利を有すること、つまり共産党と政府指導者とくに高級幹部に対する人民の監督権、②思想と言論の自由、③人民内部において反対意見や反対派が公開的に存在できること、を意味する。それゆえ彼らのいう「法制」とは、こうした人民の権利を保障し、法律を超越する特権に反対することである。

李一哲の論文は、上述の社会状況を承けて、上山下郷から都市に戻った青年たちに大きな影響を与えた。その例として、75年8月に反革命として弾圧された四川省の「馬列主義研究会(マルクス・レーニン主義研究会)」がある。さらに、74年から75年にかけて、党内闘争について思索し、文革の推進に反対する言論活動が次々に起こった。74年に文革推進に反対する書状を周恩来ほかの指導的幹部に送りつけた重慶の鉄道技術者の白智清、同じ10月に文革に反対して劉少奇ら迫害された指導者を擁護したために逮捕殺害された長春の労働者であった史雲峰、73年から75年にかけて、文革を推進する張春橋らを非難する書状を毛沢東に三回も送って拘禁された上海の劇団職員の朱錦多、75年に文芸界における江青の文革路線に反対する意見を公開の会議で発言して壁新聞にも書いた教師の李春光、社会主義下の特権階級に反対する論文を壁新聞に発表して逮捕された南京の徐水良、などについて、その事件の経緯と言論の内容について述べている。

さらにこの時期には、次のような社会情勢があった。つまり、政治経済のたてなおしによって、それまでに批判された幹部がもとの職場に戻り、文革以前の旧態に復帰する潮流が生じていた。文革推進派は、これに反対するために、大学入試などの教育問題や就職問題など、上山下郷の青年の現状に対する不満を利用して政治キャンペーンを展開した。その例として、74年に高級幹部子弟としての特権をみずから否定して大学を退学した南京の鍾志民、73年に大学受験で白紙答案を提出した張鉄生、73年に教師批判を『北京日報』に投稿した小学5年生の黄帥、

⁶ 李一哲は、李正天・陳一陽・王希哲・郭鴻志という四人の名前を合成して作ったペンネームである。

などが紹介される。これらがどうして文革推進派のキャンペーンになるか、そのメカニズムは理解しにくい。たとえば鍾志民の場合は大学の裏口入学に反対する内容であるが、その政治的な狙いはこうである。政治経済の調整によって農村や僻地に送られていた幹部が復帰し、大学入試などに口を挟む権力を獲得していた。彼らの子弟は上山下郷運動によってひどい生活を送っていた。そんな状況の子弟をそこから脱出させるために、復帰した幹部はみずからが再び獲得した権力を使用した。こうした幹部の復帰が文革推進グループにすれば文革以前への復旧にはかならなかったのだから、それに反対する事例を強調して運動に利用したのである。しかし本章でこの問題がとりあげられるのは、この時期の青年たちにとって、こうした政治プロパガンダがすでに失効していた点を強調するためである。

第7章は四五運動時期の青年思潮についてである。この時期は75年末に鄧小平批判、76年1月に周恩来死去、4月に天安門事件、9月に毛沢東死去、10月に四人組粉砕、といった大事件が連続した。まず大衆による反「四人組」の壁新聞が各地で掲出された状況について述べている。続いて、天安門広場における大衆の言論内容を、おもに董懷周編『天安門詩抄』（北京：人民文学出版社、1978年）によって分析する。当時の青年思潮を代表するものとして、上海の王申酉と雲南の陳爾晋をとりあげて述べている。

王申酉の思想は、①歴史唯物論と科学的社会主義の観点から毛沢東の階級闘争論や人民公社を批判した、②文革後期の経済問題について分析し、資本主義的な経済原則が生産性を促進することを認める、③鎖国政策をあらためて対外開放し、科学技術・文化における世界史との断絶を回復させる、④工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働などの格差問題を解決するには、文革式の大衆動員の方法は空想的社会主義であり、生産性をあげることでのみ解決できる、⑤文革推進派に反対し、天安門での四五運動を支持する、などにまとめられる。

陳爾晋は『特権論』を書いて、中国とソ連の社会主義に特権階級が出現した現象について理論的分析をおこない、その解決策として「プロレタリアート民主革命」実行の道を示した。それは、ヨーロッパ諸国の政治制度を手本に、プロレタリアートによる立法・行政・司法の三権分立制度、二大政党制、人権の保障、すなわち人民が政府と政権担当者を批判し監督する権利の保障を訴えた。彼の考えによれば、新中国成立後、旧中国とは相違する社会矛盾として、新階級の出現がある。つまり、政権を奪取した当時の革命家集団は、社会の上層部で特権階級となった。すなわち社会主義社会における階級分化の主たる原因は、旧社会の残留や外国の帝国主義による戦略によるのではなく、社会主義の経済政策そのものに存在する。中国の社会主義は、生産材料を公有制に改造した社会主義の一段階にすぎず、ソ連式修正主義へ変貌する可能性もあるような、「岐路に立つ社会主義」段階なのである。このような観点から中国の状況を分析した陳爾晋の思想に対して、本書は20頁にわたる詳細な分析を加え、文革時期の青年の思

想活動において社会制度批判を論じた最高峰の思想と位置づけている。このほかの青年思潮として、「新階級」派、「毛沢東晩年珍貴思想」派についても述べている。

さらに、「プロレタリアート」や「社会主義」を冠さない自由主義・民主主義を主張する四川の胡平らの動向がある。彼らの自由主義は57年以前あるいはさらに49年以前の中国における自由主義・非マルクス主義の民主主義に復帰しようとする方向性を持っていた。このほか、天安門事件に直接参加した陳子明も非マルクス主義の民主主義思想を抱いていたとする。ただし、彼らの思想をより深く分析する文献資料は伝わっていないという。

第8章では以上の青年思潮の主たる流れについて総括する。主たる流れは、時局や政策に対する批判と社会制度に対する批判とにまとめられる（文革最終段階であらわれた自由主義は、弱小であり西洋思想の影響であるとして、これら主たる思潮とは別に位置づけられている）。そして、この二思潮の源流について、前者は党内実務派の主張、後者はマルクス主義理論から湧出したとみて、その根拠を例証する。さらに、こうした思潮の流派と中共党内闘争との関係を論じる。つまり中共の独裁下では、中共中央に反対する思想は合法化されず、公開には存在できないため、民間の批判的思想は中共党内の分岐した意見にあずかつてのみ存在を許されるのである。したがって、思潮の動向を党内闘争から読み直すことが可能となる。

結論として、文革の対象と任務、政策批判と制度批判という思潮の二方向、党内闘争との関係などをまとめたあと、文革期間の青年思潮の思想史的な意味として、次のように述べる。①この思潮は、中国現代の思想がイデオロギーと個人崇拜の迷信的な呪縛からみずからを解放し、思想の独立へと向かった軌跡である、②この時期における作家や大学教師などの知識人は、長期にわたる左傾思想による思想改造をうけたために、多くが独立的思考の精神と社会的良心を発揮する意志を喪失させられていた。青年の思潮には、そうした知識人にかわって中国思想史の空白と断絶を補充する役割があった、③この思潮は、1957年の反右派運動時期における民主・法制的思考を承け、また文革以後の思想解放運動の先駆となった、④この思潮の中でも、ソ連式社会主義モデルにおける特権階級の出現に対する認識と分析は、社会主義思想史の重要問題であり、それに対して一定程度の思想的探索をしている、⑤この思潮は、文革における困難な条件下で思索され、文革時期のみならず、その後の時期に至るまで、当事者は迫害を受けたり殺害されたりしたが、そのことは民主と法治・人民の思想と言論を保障する権利を全うすべきであるとする決意を後世の人々にもたらした。

研究史における位置

本書のような問題を扱った専著は、香港以外の中国大陸内では出版されていないだけでなく、

論文もほとんどない。また、欧米の研究では、紅衛兵運動についての研究はかなり深まっているが、68年秋以降の青年思潮についてはやはりほとんど研究されていない。この方面の問題を扱った専著で出色なのは、徐友漁『形形色色的造反—紅衛兵精神素質的形成及演变』（香港中文大学出版社、1999年）である。この著作は、紅衛兵世代が文革前に受けた教育やイデオロギー、そして政治闘争の影響などを検討、そして紅衛兵の地区的な違いと年齢的な違い、保守派・造反派と造反派内部のセクト（穏和派と激進派）の分析、それらの全国における動向、造反の原因、下放による幻滅と覚醒のプロセス、その結果による彼らの思潮の特徴、といった問題を扱っている。この著作でも68年秋以降の青年思潮は少なからず扱われてはいるが、力点は紅衛兵運動内部の派閥と地域的な特徴およびその動向にあり、その点の分析がすぐれている。印氏の研究は徐友漁の著作をふまえて、紅衛兵運動内部の派閥の問題に修正案を出し⁷、さらに68年秋以降の青年思潮に論述の重点を置きなおしている。また、徐友漁は紅衛兵の思考方法に対して精神分析的な検討を加えるが、印氏は社会思潮として捉えようとしている。

このほかに本書が多く参照している著作に、宋榮毅・孫大進『文化大革命和它的異端思潮』（香港中文大学出版社、1997年）がある。この著作は、紅衛兵運動時期の思想的な論文を集めたもので、一種の資料集であるが、宋榮毅は解説で文革中の「異端」思潮についてすぐれた分析をしている。また、紅衛兵の当時における実際状況や思考を述べた著作、たとえば王紹光『理性与瘋狂—文化大革命中的群衆』（香港：牛津大学出版社、1993年）、唐少傑『一葉知秋—清華大学1968年「百日大武闘」』（香港中文大学出版社、2003年）、陳佩華『毛主席的孩子們—紅衛兵一代的成長与経歴』（天津：渤海湾出版公司、1988）⁸などを参照している。

ただ、残念ながら本書では日本の文革研究が反映されていないようにかがえる。たしかに日本の研究でも紅衛兵の流派や68年以後の思潮について議論したものは多くないが、少なくとも遇羅克や李一哲については、かつて加々美光行氏が先駆的で詳細な研究をしている⁹。

なお、印紅標氏には、68年以降の青年思潮がどのように文革を考えていたか、という本書の後半の問題を略述した論文がある¹⁰。

おわりに

本書の研究をふまえれば、今後の課題は非常に多く見いだされてくる。評者の関心から、次

⁷ 印氏は造反派と「極左派」を分けて考えている点など。

⁸ 原書名は、Anita Chan, *Children of Mao: Personality Development and Political Activism in the Red Guard Generation*. London, Macmillan, 1985.

⁹ たとえば加々美光行『逆接としての中国革命—アジア近代精神の敗北』（田畑書店、1986年）がある。

¹⁰ 印紅標「中国人の文革観」（森瑞枝訳）、土屋昌明編著『目撃！文化大革命—映画『夜明けの国』を読み解く』（太田出版、2008年）、頁150～163。

の諸点をあげておこう。

紅衛兵の種類や思想傾向・行動様式・地域性などについては、徐友漁『形形色色的造反』および本書の分析によって、相当詳細に認識できるようになった。つぎには、紅衛兵のそれぞれの派閥の特徴がどんな社会的要因によって生じたのか、さらに分析すべきであるように思われる。つまり、本書の分析は「老紅衛兵」は高級幹部の子弟、保守派は党委員会・工作組に忠実な学生、造反派は工作組に反対した学生などがそれぞれ核になっているとするが、彼らがそのような立場にたった要因を考えることもできるのではなかろうか。「老紅衛兵」については高級幹部の子弟という、一種の出自あるいは家庭環境が要因として明確だが、ほかの者はどうだったのか。造反派には学生の他に労働者も多く参加したが、本書では造反派の定義を狭くとらえているため、学生以外の構成要素についてはあまり言及されていないように思われる。そうした者が造反派に参加した動機も記述される必要があるのではなかろうか。たとえば、半農半読で農場に勤めたり、半工半読の夜間学校へ行ったりする者が66年後半には造反派に参加したが、彼らはみずからの境遇が勉学にも労働にも中途半端で差別されていたことから、その政策を考案した劉少奇を批判した。こうした境遇は都市の恵まれた環境にいた紅衛兵からは理解されず、彼らはいっそう深い思索に追い込まれたとされる¹¹。また、文革の直前、63年からおこなわれた社会主義教育運動で各単位に入った工作組が進めた摘発が66年前半の工作組のモデルとなっているところからすれば、文革中の大学に進駐した工作組に反対した学生たちと社会主義教育運動との関連が予想されるように思われる¹²。

紅衛兵の各流派の思想は中央の党内闘争を反映していたから、党内闘争との関連を考慮することによって、その配置が理解しやすくなるが、上山下郷以後の思潮は文革時期の多方面に対して展開したため、系統的な認識がむずかしいように思われる。そのため、この時期についての論述は、青年たちが読書と思索をした物質的な条件を社会史的に検討するのと、個別の思想的探索と公安の摘発による挫折という事例とがべつべつに叙述される。おそらく両者を結びつけて論じるような具体的な事例や資料が存在しないのであろうし、そのような事例は摘発されて公開されたからこそ確認がおこなえるのであろうが、回想録やインタビューなどから、青年たちの物質的条件と思潮の成長をより緊密に認識していきたい。

文革時期の思潮が天安門事件を導き、またその後の「思想解放」（78年12月中共11期3中全会の方針の一つ）の先駆となったことを指摘している点は、本書のすぐれた特徴であるが、

¹¹ 山本恒人「1960年代における労働・教育・下放の三位一体的政策展開とその破産—半工半読制度に焦点をあてて—」加々美光行編『現代中国の挫折—文化大革命の省察—』アジア経済研究所、1985年。

¹² たとえば劉少奇夫人の王光美は造反派にひどく迫害されたが、彼女が社会主義教育運動で赴いた河北省桃園でおこなった摘発は非情だったことが知られている。こうした工作組の回想として、楊威理『豚と対話ができたころ』（岩波同時代ライブラリー、1994年）が参考になる。

おそらくこうした思想は鄧小平時代に入ってから否定された民間の思想(たとえばいわゆる「北京の春」運動など)とも関連していると思われる。70年代末から80年代にかけては、文革が否定されるだけでなく、自由主義・民主主義も否定されており、この時期の思想と本書で扱われた思想との関連性をより全面的に検討することが、現代中国の思想史を考えるために必要であろうと思われる(ただし、それは容易なことではない)。

評者は日本人であるから、その立場から最後に一言しておきたい。文革がはじまったとされる1966年に評者はまだ物心つかない童子であったから、紅衛兵運動を直接目睹したことはない。当時、特別なルートで中国の現地を訪れたり、それ以前から中国に住んでいた日本人を除いて、大部分の日本人は映像によって文革における紅衛兵運動を目にしただけであろう¹³。それゆえ、紅衛兵に対して日本人が抱くイメージは非常にステレオタイプであり、なかには紅衛兵は文革中ずっと『毛沢東語録』を手に振って暴れていたと思ひこんでいる人もいる。しかも、日本人で毛沢東・文革を支持した人たちも多く、日本の学生運動にも影響したため、文革の暴力性が暴露され否定されることによって、文革に対する関心は薄れ、それはそのまま中国の60年代から70年代という現代史への無関心となった¹⁴。しかし、文革時期が重要なことは本書評の冒頭で述べたような、現代社会に続く世代の問題だけではない。本書から窺える著者・印紅標氏の知的追求への情念に、評者はこの時期の問題を認識することの重要性を強く感じるのである。著者の次の言葉を最後に紹介しよう。みずからの思想を表明することで、権力によって殺害され、思想に殉じた人々について、著者は次のように述べている。「文革期間中の青年たちの諸思考は、現代人の目からすれば、また人類の思想史からみれば、先行する思想家を超えるような新しさはなにもないが、文明の歴史を断絶させ、人々の目と耳を封殺したあの時代にあつて、耳の遠い者をもそばだたせる声であり、長夜の闇に輝く星の光であつた。それらは、あの時代の人々に希望をもたらし、この民族の精神はまだ完全には死に絶えていない、まだ希望の光明があるのだ、と教えていたのである。世界が暗ければ暗いほど、この星の光はいよいよ貴いのであり、その価値はアカデミズム的な価値によって計れるものではない¹⁵。

¹³ 1967年以降の日本で紅衛兵の動画を見ることができた映像に、岩波映画製作所の時枝俊江監督『夜明けの国』がある。このドキュメンタリーは、66年8月中旬から翌年2月上旬まで中国で現地ロケをおこなっており、紅衛兵の実際の活動が多く記録されている。また、中国共産党が制作した、66年8月18日の天安門広場における毛沢東の紅衛兵閲兵の様相を記録した映像が引用されている。このドキュメンタリーについては、土屋編著『目撃！文化大革命—映画『夜明けの国』を読み解く』(太田出版、2008年)を参照のこと。なお私見では、天安門広場で『毛沢東語録』を振り上げながら「毛主席万歳」を叫喚する紅衛兵のイメージは、おもにこの8月18日の記録映像がテレビで反復利用されて形成され、それが日本人の文革イメージを強固に規定してきた。

¹⁴ この点については、竹内好の再評価から私見を述べたことがある。土屋昌明「竹内好と文化大革命」『専修大学社会科学研究所月報』539号、2008年5月。

¹⁵ 本書、頁155。